

## 〈研修会参加記〉

# 平成9年度大学図書館職員 長期研修に参加して

鈴木 恵子

1997年7月14日から8月1日までの約3週間にわたって行われた「大学図書館職員長期研修に参加する機会を得たのでここに報告する。文部省および図書館情報大学主催のこの研修会は、教育・研究活動の急速な進展に伴って学術情報の迅速かつ的確な提供が重要となってきたため、職員の資質と能力の向上を図り、情報サービス体制を充実するべく、中核となる最新の知識を教授することを目的としている。

第一週目は、大学図書館の在り方について、サービス、保存、ボランティア、設備、事務の能率化などの側面から講義を受けた。特にサービスの在り方は、身近なこととして興味深く聴くことができた。電子図書館的機能の整備が進んでいくと職員が減る。このような状況の元でサービスを向上させるにはどうすればよいか。どの図書館においても共通の課題であろう。

また、実習としてワークステーションに実際に触れてみることで、その基本的な操作を体験することもできた。一回の実習では操作の開始と終了の仕方を覚えるのがやっとであったが、参加者同士で電子メールのやりとりを行い、無事メールが受信された時は、大満足であった。

第二週目は、東京大学、慶応義塾大学藤沢キャンパス図書館、学術情報センターを見学。それぞれの館で現在開発中のシステムの紹介と今後の課題を中心にした講義を受けた。東大の赤門をくぐり、歴史を感じさせる建物を横目に見ながら図書館に着くと、クーラーがうまく作動して

おらず、とても暑い部屋に通された。国内でも真っ先に電子図書館関係の研究開発を進めている先進大学にしてはと、こんなことで緊張感が緩んだ。実際に貴重本を電子化している過程をみせてもらったが、なかなか思惑通りにはいかないらしく、説明に苦慮している部分があった。慶応の藤沢キャンパスではメディアセンターをみせてもらった。蔵書冊数は20万冊と多いとはいえないが、キャンパス全体にネットワークが張り巡らされ、コンピュータ環境がいつでも使えるように整備されているため、十分なのだというのであった。学術情報センターでは、初めて、ここでどのような活動をしているかや、現在取り組んでいる研究を中心に講義を聴くことができ、普段何気なくお世話になっている学術総合目録などが身近に感じられた。

また、前もってアンケート調査のあった討議課題に基いてグループ分けされ、共同討議の機会が与えられた。わがC班は「電子図書館時代の図書館サービスの在り方と相互協力への取り組みについて」をテーマに掲げ、現状を分析し、問題を抽出・討議し、その対応策、解決策、課題等を探った。はじめに、インターネット等を通じて提供するサービスの種類を出し合い、そのサービスを利用者に有効的に活用してもらうためにはどんなことが必要かを具体的に検討していった。また、実行するに当たっての問題点を想定して、それぞれの対応策や解決策も考察した。討議の時間は4コマ。進め方は各グループに任せられたが、発表までにワープロで打ったものを用意しておくということだったが、間に打ち上げ会が入り、夜遅くまでかかってみんなで仕上げたことは、今となっては大変懐かしい思い出である。討議の結論は、電算化が進み、利用者にとって便利になると、反対に人員を削減された図書館側では、仕事量が増加して対応仕切れない状況が生じる。しかし、嘆いてばかりいても仕方がないので、質的向上を目指し、学び合い、専門性を高めるべく努力し、実情に応じて、段階的、継続的に進めていこうということだったと思う。

第三週目は、まず、在外研究員からの英国における電子図書館に関する動向を中心にした報告があった。次に、国文学資料館、東京工業大学、国立国会図書館の見学。国文学資料館では、必ずしも設備が整っているとはいえない場所で、環境を一定に保つべく、並々ならない努力をされている館員の姿に深い感銘を受けた。自分たちが守ってきた古い資料の説明をする顔から、愛情がにじみ出ていた。東京工業大学では、学内LANを利用した情報提供サービスの講義を受け、実際に国内で初めて導入されたArielシステムの使い方などを見せてもらった。講義の後では懇親会を設営していただき、楽しい情報交換の時を持った。国立国会図書館の中は広く、ローラースケートでの移動を想像させるような書庫での圧巻。虫に食われた紙の穴を一心に埋め込んでいく人。少しの違いもない位に同じ紙を選択し、活字を植え込んでいく人。こんな仕事もあるのかと感動を覚えたものである。

今回の研修会は全国から42名の国立・県立・私立大学の図書館員の参加があった。他の研修会にないほどの少人数で行われたこと、宿泊場所が合宿所みたいだったことで、参加者と個人的に意見交換をする機会が十分に持てたことは、今後の日常業務を進めていく上で大変実りあるものとなった。また、この研修会を受講して、情報環境の変化・発展は図書館の情報サービスの提供の仕方にも緊急の対応が迫られていることを実感させられた。中京大学の場合、学内LAN・インターネットに関しては整備途上にある。図書館員は情報に最も近いところにいるということを認識し、利用者の求める情報を提供する情報発進地としての役割を果たすべく、自らの資質を高める努力をしていかなければならないと切実に感じる。

最後になりましたが、この場を借りて、少ない構成員の中から快く送り出して下さった上司、同僚の面々に心よりの感謝の意を表したい。

## 編集委員から

中京大学図書館学紀要の第19号発行に際して、執筆者の方々は勿論の事、館長はじめ図書館職員の方たちのご協力に対し、心より感謝の意を表します。

今回は、特に法学文献センター開設に伴う、資料の移管作業や図書館システムwww対応に伴う事務室の改装、配線の再構築など、例年になく忙しい時期に紀要の発行ができたことは、ひとえに関係各位のご協力の賜と思っています。

このような忙しい時期に編集作業をした関係上、不備の点があるかもしれませんが、執筆者の熱意は、伝えられたと自負しています。

今後とも、編集、構成などに工夫を凝らし紀要の継続発行をしていきたいと思っています。

以下に、原稿募集要項を載せておきますので、寄稿していただける方は、是非お願いいたします。

## 中京大学図書館学紀要原稿募集要項

内 容 図書館、図書館情報学や書誌に関する論文、調査、報告、書評、意見・感想など。

枚 数 論文は400字詰め原稿用紙30枚程度、ワープロ原稿ならA4、15枚（1枚33字×28行）程度。

それ以外は原稿用紙20枚以内、ワープロ原稿なら8枚以内。

（図表、写真も枚数に含む）ワープロ原稿はフロッピーを添付のこと。

締切り 1998年12月19日(土)

その他 寄稿される方は事前に編集委員までお申し出下さい。